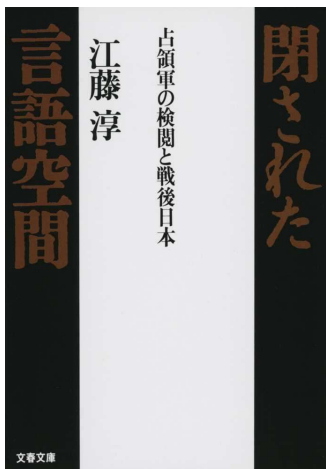


2025
新年号

千の声 VOICE NO.22



～ 占領軍の検閲と戦後日本～ 「閉ざされた言語空間」

江藤淳/文春文庫

「さきの大戦の終結後、日本はアメリカの軍隊によって占領された。そしてアメリカは、占領下日本での検閲を周到に準備し、実行した。それは日本の思想と文化とを殲滅するためだった。検閲がもたらしたものは、日本人の自己破壊による新しいタブーの自己増殖である。膨大な一次史料によって跡づけられる、秘匿された検閲の全貌。」

(本書裏表紙より)

目次

第一部 アメリカは日本での検閲をいかに準備していたか

第一章

「昭和五十四年(1979年)秋から昭和五十五年(1980年)にかけての約半年間、私は、ワシントンを中心部に在るウィルソン研究所から、メーランド大学附属マッケルデン図書館と、スートランドの合衆国国立公文書館分室に、数日置きに交互に通うという日課を繰り返していた。私は、九か月間と限られたワシントン滞在中に、日本占領中米占領軍が行った新聞、雑誌等の検閲の実体を、できるだけ明らかにしたいと考えていた。」(本文p8から、一部省略)

「思えば、昭和五十四年(1979)十月二十四日は、私の検閲研究にとって、一転機を劃した日だったような気がしてならない。私は、この日、同じボックスのなかから、ウィロビー覚書のみならず、「SCAPが憲法を起草したことに対する批判」「検閲制度への言及」等々、三十項目の禁止事項を列挙した民間検閲支隊の「検閲指針」をも発見することができたからである。」(本文p24から、一部省略)

第二部 アメリカは日本での検閲をいかに実行したか

第七章

「当裁判所においては、平和に対する罪、また人道に対する罪につきお裁きになる権限がないということである。いままでもなく、当裁判所は連合国が一九四五年七月二十六日ポツダムにおいて発しました降伏勧告の宣言、そのなかに連合国の俘虜に対して残虐行為をなしたる者を含むすべての戦争犯罪者に対しては峻厳なる裁判が行われるべし、という条規が根源であります。」(「東條元首相の弁護人清瀬一郎博士」の陳述より、本文p297)

「…勝者が敗者を裁くという掛かる法廷は、まことに世界の歴史上前例を見ないものである。(…中略)」

「吾等は日本人を民族として奴隷化せんとし又は国民として滅亡せしめんとするの意図を有するものに非ざるも吾等の俘虜を虐待せる者を含む一切の戦争犯罪人に対して嚴重なる処罰を加へらるべし」

この条項にもとづいて、当法廷は開かれているのである。したがって、俘虜を虐待せる者を含む一切の戦争犯罪人が、当法廷で裁かれているということになる。この点に関して、私は、昨年法廷が開廷された直後に一つの異議を提出した。戦争犯罪人に対する私見は次の通り、すなわち、戦争犯罪人とは、現実に俘虜を虐待した者、ないしは既存の国際法規を侵犯した者に限定されねばならぬ、とするものである。」(本文p302から、一部省略)

「つまり、極東軍事裁判は、それ自体が大掛かりな「ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム」であったのみならず、日本人から自己の歴史と歴史の信頼を、将来ともに根こそぎ「奪い」去ろうとする組織的かつ執拗な意図を潜ませていたのである。そして「奪」おうとする者と、「名誉」を「擁護」し、「事実の歪曲や悪意ある批判に対抗」しようとする者とのあいだの必死の抗争が、市谷法廷ばかりではなく、占領下の日本の言語空間のいたるところで展開されていたということを、これら一連の文書は明らかに示している。」(本文p310から、一部省略)

<<石川塾の日曜朗読会(月1回)に参加された 四名の方から感想文をいただきました>>

●私の原風景と『閉ざされた言語空間』を読んで

1.

この著作で繰り広げられた時空は、正に私自身が生まれた時期でした。1945年(昭和20年)8月14日に日本が連合国に対してポツダム宣言受諾を通告し、8月28日に先遣隊が、30日にはマッカーサーが厚木飛行場に降り立って日本は、連合国(アメリカ合衆国とイギリス)の占領下に入りました。占領状態が解消し日本が主権を回復するのは、1952年4月28日のサンフランシスコ講和条約(締結は1951年9月8日)の発効日とされますから、実に6年8ヶ月に及びます。これは、何と、日本有史以来初めての外国による占領です。日本は、外国に侵略され、占領された経験を持ちません。一度だけその可能性がありました。1274年(文永の役)と1281年(弘安の役)の元寇(モンゴル帝国5代皇帝フビライ)のです。この時は、北条時宗の執権時代で、鎌倉武士団が防衛に立ちはだけりました。神風が吹いたか朝鮮で建造された元軍の軍船が粗製乱造であったか判りませんが、とにかく鎌倉幕府は防衛に成功しました。日本国土を囲む海が、城で言えば堀に当たると思います。日本が島国であることの幸運と、日本武士団の奮闘に感謝します。この時、モンゴルに征服されていたら、今の日本はなかったかもしれません。弘安の役において、日本に派遣された艦隊は、当時世界最大規模の艦隊であったと言われますが、大東亜戦争(アメリカの日本人に対する洗脳では「太平洋戦争」)での連合軍(主にアメリカ合衆国)の軍隊も同じく、当時(今でも)世界最大規模の艦隊です。今度は勝てるはずもありませんでした。

マッカーサーは、講和条約締結の4か月前の4月11日に連合軍最高司令官の職を解かれ、16日に離日しています。マッカーサーの有名な「老兵は死なず、ただ消え去るのみ」と言う言葉は、日本を去る時に日本人に向けて発せられたものと、私は勘違いしていました。実は、帰国後の4月19日に、合衆国議会合同会議での退任演説で言ったものでした。また、マッカーサーが初めて使った言葉でもなく、兵隊歌「Old Soldiers Never Die」(元々は、ゴスペル歌『Kind Thoughts Can Never Die』の替え歌)の一節を引用したものでした。

私が生まれたのは1947年7月ですから、連合軍の日本占領が開始して1年11ヶ月経過してからです。そこで、私は幼くして駐留軍(何故かそのように呼ばれていた記憶がありますが、後からの周囲からの聞き覚えかも知れません)が居たことや、本書の主題である検閲が日本の言論界を覆っていたことは知りませんし、記憶にもありません。私が物心ついたころには、目に見る世の中には、戦争(敗戦)の爪痕がたくさん残っていましたが、生れて初めて見る世界で、他の世界を知りませんから、不思議とか異常とかの感覚はありませんでした。それが日常だと感じていたのかも知れません。一番強烈な印象を受けたのは、駅頭で蹲っていたり、省線の車内で白衣を着て義足、決まって兵士の帽子をかぶり、アコーディオンを弾く傷痍軍人でした。サングラスを掛けたイメージがあります。不思議なことは、彼らの声やアコーディオンがどんな曲を奏でていたかの記憶がなく、無声映画を見るような音の無い映像が脳裏に残っています。これが私の原風景の一部です。

2.

前置きが長くなりました。本書で江藤淳が論ずる「占領軍の検閲」があったことは、その後の学校で学んだ戦後の歴史や大人たちの会話から知ってはいましたが、殊更詳しくその内容を見聞したり学んだことはありません。もちろん法律(憲法)を学ぶ上で「検閲」は日本国憲法第21条2項で「検閲は、これをしてはならない。通信の秘密は、これを侵してはならない。」と規定された人権の一つとして重要な課題です。日本国憲法は、私が生まれる前僅か3ヶ月に満たない5月3日に施行され、訳も分からず、これにどっぷりと浸かって成長し、大学の授業や司法試験の勉強の中で、これを最高の基本法とする民・刑法、訴訟法を学んで法律を職業として半世紀近くの時が及んでしまいました。この憲法が占領軍からのお仕着せであり、日本人が考案したものでないことは、従来から喧伝されていたから知っていました。憲法の是非はその内容の是非にあるとしながら、無批判に受け入れて自分の法的思考の原点としてしまったことには後悔しなければいけないと思うようになりました。

本書を読んで考えたことは、日本国憲法の持つ暗い生い立ちにあると思います。本来、憲法とは、その国民が他からの影響を受けることが無い状態で、自らの国の姿を自ら決めるべきものです。この憲法は、時の政府によってつくられた草案がマッカーサーに却下され、占領軍の部署において短時間で起案され、国会で形式的に明治憲法上の憲法改正の手続きで制定されたことが問題であることを置いておいても、本書が語るごとく、郵便・電話・通信はもちろん、ラジオ・映画・新聞・雑誌・映画・文学作品を含む全ての出版について広くかつ厳しく行われた検閲とその結果として規制・制限は止まるところを知りません。江藤淳が『閉ざされた言語空間』と呼んだのは、ぴったりの表現だと思います。占領軍(アメリカ)の検閲の目的が、終戦後のことですから、戦争追行目的ではないことは明らかで、占領遂行の目的や日本人に対する将来的に軍国主義を排除する目的があったことは間違いないでしょう。しかし、占領軍の行った検閲と憲法の押し付け、教育制度への介入(WGIP:ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム(英語: War Guilt

Information Program)「日本人の心に国家の罪とその淵源に関する目的で開始し、かつこれまでに影響を及ぼしてきた民間情報活動の概要」(p262、一部省略)といった語句 江藤淳)の実施は、ポツダム宣言にも反する(国民の自決)国際法違反行為であると言われています。自らの不利・不都合に当たる全ての事実を覆って、国民の目と耳から遠ざけ、国民を一時的(7年間はそんなに短くはないが)見えない聞こえない状態にした上で、アメリカの都合の良い思想体系を植え付けることを目的として実施された。日本人は、その結果、アイデンティティーの多くを奪われたのだと思いました。二度と立ち上がれないような軟弱な民族になり果ててしまったのではないか。

3.

著者が「あとがき」の最後に記載した文章にこのような言葉があります。

「日本の読者に対して私が望みたいことは、次の一事を措いてほかにない。即ち人が言葉によって考えるほかにない以上、人は自らの思惟を拘束し、条件付けている言語空間の真の性質を知ることなしには、到底自由にものを考えることができない、という、至極簡明な原理がそれである」(p368)

私は、その少年期、青年期を通じて、主としてラジオ、それもFM放送が試行された時代にあつて、アメリカのポップス音楽を聴いて育った。50年代、60年代はアメリカの演歌的存在であるカントリー・アンド・ウエスタンに影響を受けた流行歌、それに続くビートルズやカーペンターズに染まってしまった。「お！日本の演歌も良いじゃないか」と気が付いたのは、カラオケ全盛の時代が来てからである。私は、ビック・オーケストラのムード・ミュージックはたくさん聞いたが、どうしてもジャズだけはのめり込めない音楽音痴だった。今でも、ふと浮かぶメロディーはオールディーズの数々である。これらの種類のメロディーが私の脳細胞に染みついてしまっている。つまらないことだが、日本人としてのアイデンティティーの喪失に類するものであろうか？ 不正に対する憤りを感じる心をなくしてはいないか？ アメリカナイズされた世界に対する批判に怖気づいていないだろうか？

先ごろ、ニュースを賑わした兵庫県知事問題、行政や議員と癒着したマスメディアが事実(自死した局長のPCの内容)を隠して報道しなかった、というSNSの報道はフェイクか？ 私には確信的な判断は出来かねるが、そうでないとすると、占領軍の検閲実施の時から70年以上経過した現在でも、報道機関の自主規制が生きていて、報道の自由は崩壊しており(嘘の事実を報道するのと、事実を隠蔽して報道しないことが同義であることを理解していない)、国民の知る権利は侵され、これによって成立している民主主義は崩壊する。もちろん、現在のアメリカ合衆国に於いても同じようなことが起きているそうである。「バイデン大統領の選出に於いて、彼の長男のゴシップが報道されずに隠された」との評価は本当だろうか？ 失職した斎藤氏が知事選で再選された、トランプが大統領に返り咲いた、この符合する事実は偶然の結果であろうか。事実が隠された結果は、人々の歴史感が変わり、民族性が変化し、歴史が変わることになるのか。

現在進行中のイスラエルとヒズボラの戦争の中で、イスラエルのネタニヤフ首相は、「イスラエルは国土を失っては存在できない」と言うようなことを言っているが、ユダヤ民族を考えると、彼らは(ユダ王国)は、紀元70年にローマ帝国軍に滅ぼされて国土を失い、世界中に離散した。しかし、彼らは、宗教(ユダヤ教)の教義を守り、アイデンティティーを失わなかったのも、各地で生存し続け、激しい弾圧やジェノサイド(ヒットラーと共産ロシア)を受けても、商業、政治、科学、学問の分野で優秀な人材を輩出し、世界の歴史に(良くも悪くも)多大の影響を及ぼして現在に至っています。戦争してガザの一般人を巻き添えに殺しているイスラエルを擁護するつもりはさらさらないが、有史以来、幾多の民族が戦争で敗れて絶滅し、あるいは他民族に吸収されて民族性を失った中で、ユダヤ人が国土を失っても民族は消滅しなかった。ユダヤ人問題と日本における占領軍の検閲は関係がありませんが、占領軍による日本民族改造計画からユダヤ人の歴史に思いを馳せてしまいました。(林史雄 弁護士)

●いまだに罪悪感と自主検閲が続く日本

今年の夏から、朗読会に参加して『閉ざされた言語空間』を読み始めました。石川先生に誘われて参加したのがきっかけでした。最初は正直、あまり興味はありませんでした。しかし、朗読会でいろいろなお話を聞いたり本書を読み進めていくにつれて、とても興味がわきました。というよりは、知っておかなければいけないと強く感じました。また、本書と同時に『東條英機 歴史の証言』も併読していました。そこには、小中学校で教えられた歴史と全く違って異なることが書いてありました。

みなさんは、「ウォー・ギルト・インフォメーションプログラム(WGIP)」という計画をご存知でしょうか。これはアメリカが作成・実行した計画で、「日本人の心に国家の罪とその淵源に関する自覚を植え付ける目的」(p262)でつくられ、実施されました。日本人に戦争の責任をすべて押し付けて、罪悪感を持たせようといつづられたのです。それは、まるで日本が真珠湾に奇襲攻撃を行って、侵略戦争を仕掛けたかのように思わせ、「日本から仕掛けたのだからしょうがない」と罪の意識を永続的に日本人に植えつけさせるというものです。この「ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム」は、教育や報道の検閲(新聞、ラジオ、雑誌等)などを通して実施されました。なぜ永続的に植えつけるというこの計画が実施できたのか。それは、この計画の教育を受け、強制的に思想を制限された現 70～80 代の方が、戦後のメディア業界や教育関係に就き、現 40～50 代の方に思想を制限させ、現代のメディア業界や教育関係に就き、現 10～20 代の

方に思想を制限させているからです。つまり、世代を超えて永続的に、思想の制限を自動的に実施できると、アメリカは踏んで第二次世界大戦終結前からこの計画を周到に準備・実施したしてきたのです。「ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム」によって思想を制限された人が、次の世代の思想を自動的に制限し、次の世代を自動的に制限しているのです。つまり、ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラムを受けた人による、ある種の自主検閲が、今日の日本人の思想を形成したわけです。そこまでアメリカは踏んでこの「ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム」を実施したのです。もはやある意味で、その計画の用意周到さに感銘を受けました。また、「ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム」の渦中に私たちは存在しているのです。また、次の世代も、その次の世代も、そのまた次の世代も「ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム」の渦中の中に入る可能性があるということです。アメリカの思い通りにさせない・次の世代を計画の渦中にさせないためには、私たちが正しく歴史を知り、自分の考え・思想をしっかりと持たなければならないと思います。

「ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム(WGIP)」のことを聞いたとき僕は、「そんなのいわゆる陰謀論だ」と思いました。しかし、本書は全部引用がはっきりと書いてあり、本当なんだなと思いました。初めてこの計画を聞いたときは信じられないと思います。世間的にもあまり聞かないことだし、ネットなどで調べても情報が不確かだと思います。それに、こんなこと知りたくないと思います。しかし、自国の歴史を正しく知る・学び直すことは、大切なことではないのかなと思います。これらのことは、日本人全員が自分で確かめなければならないと思いました。そのためには、情報の信頼性のあるものを選び、調べなければならないと思います。ここまで上から目線で、世の中を知らない未熟者が記述してきたのは、自分へのメッセージ・戒めでもあります。

本書の筆者・江藤淳が実際に経験した、メディア・映像関係についての重要な記述について触れたいと思います。筆者・江藤淳が天皇陛下御在位六十年の奉祝事業(1985年頃)として映画作成事業に携わる機会があった際に、「天皇と皇室に対する言葉遣いの問題になると、なぜかたちまち神経質かつ防衛的な態度を露呈する」(p349、一部省略)というのです。例えば、「御製」(皇族、特に天皇が詠んだ和歌や詩文をいう)(コトバンクより)という言葉を用いようとする、「御製という言葉はいまは使わないのだ、いや使ってはいけないのだという返事である。」(p350、一部省略)「それならなんといえがいいのかと重ねて訊いたところ、いまは“お歌”といわなければならないことになっている」(本文引用)というそうだ。「なにしろ宮内庁がやかましいので、放送会社も映画会社もそれぞれ手引きをつくり、かりそめにも“お歌”を“御製”などといい間違えないように、慎重の上にも慎重を期しているのだ」(p350、p351)というのです。つまり、御製という言葉を使わないように宮内庁が干渉していて、手引きを作成して慎重に言葉を選んでいくということです。これが事実であれば、日本国憲法の第二十一条第二項の「検閲は、これをしてはならない。通信の秘密は、これを侵してはならない。」の検閲禁止条項に抵触するのではないかと筆者は記述しているのです。また、「天皇と皇室に関する限り、依然として日本の自由な自己表現を拘束しつつしていることを意味するではないか」(p351)というのです。また、このほかにも訂正された言葉はたくさんあったそうです。(p357～p360)

これらのことが実際に起こったとすれば、今現在(2024年)もこれらのことが起こっているのかはよく知りませんが、少なくとも、1985年時点で”検閲”といっても良いことが実際に起こっていたということです。まだ戦争は終わっていないのだなと改めて思いました。(望月勇輝 高校一年)

●検閲指針 ～削除または掲載発行禁止の対象～

『閉ざされた言語空間』を読んでアメリカの連合軍最高司令官総司令部「通称 GHQ」が占領下の日本国に対して行った言論統制の検閲政策の凄まじさをまざまざと感じました。(以下235ページから242ページの概要)

◀解雇された二人の理由

「寺沢芳隆 (イ)書籍検閲手続きに関し出版業者と私かに論議せり。(ロ)当検閲部検閲官の室に於いて干渉がまじき不服従の態度をしめせり」(p236、一部省略)

「坂上実 一、通信社文課記事検閲員坂上実氏を怠慢の簾により本日付けを以て解雇する。二、米軍 MP の中尉が東條元大将の煙草に火をつけてやっている写真は、直ちに監督官に問い合わせ最高司令部担当部局の見解をもとめるべきものであることを、いかなる通信社検閲委員も熟知していなければならない。」(p236、一部省略)

「検閲者の最底辺に位置する日本人検閲員に深く浸透し、彼らの行使する青鉛筆(検閲にチェックを入れる物)を通して、被検閲者のあいだに的確に浸透をつづけた。二人の解雇から二か月後の昭和二十一年十一月末には、すでに次のような検閲指針がまとめられていたことが、米公文書館分室所在の資料によって明らかである。」

○削除または掲載発行禁止の対象となるもの

- ①SCAP(連合軍最高司令官指令) 一連合軍最高司令官(司令部)に対する批判 ②極東軍事裁判批判
- ③SCAP が憲法を起草したことに対する批判 ④検閲制度への言及 ⑤合衆国に対する批判 ⑥ロシアに対する批判
- ⑦英国に対する批判 ⑧朝鮮人に対する批判 ⑨中国に対する批判 ⑩他の連合国に対する批判
- ⑪連合国一般に対する批判 ⑫満州における日本人取扱いについての批判 ⑬連合国の戦前の政策に対する批判
- ⑭第三次世界大戦への言及 ⑮ソ連対西側諸国の「冷戦」に関する言及 ⑯戦争擁護の宣伝 ⑰神国日本の

宣伝 ⑱軍国主義の宣伝 ⑲ナショナリズムの宣伝 ⑳大東亜共栄圏の宣伝 ㉑その他の宣伝 ㉒戦争犯罪人の正当化および擁護 ㉓占領軍兵士と日本女性との交渉 ㉔闇市の状況 ㉕占領軍軍隊に対する批判 ㉖飢餓の誇張 ㉗暴力と不穏の行動の煽動 ㉘虚偽の報道 ㉙SCAP または地方軍政部に対する不適切な言及 ㉚解禁されていない報道の公表

以上、ここで意図されているのが、古来日本人の心に育まれて来た伝統的な価値の体系の、徹底的な組み換えであることは言うまでもない。こうして日本人の周囲に張り巡らされた新しいタブーの網の目のうちで、被検閲者と検閲者が接触する場所はただ一箇所、第四項に定められた検閲とその秘匿を通じてである。

検閲を受け、それを秘匿にするという行為を重ねているうちに、被検閲者は次第にこの網の目からめとられ、自ら新しいタブーを受容し、「邪悪」な日本の「共同体」を成立させて来た伝統的な価値体系を破壊すべき「新たな危険の源泉」に変質させられて行く。この自己破壊による新しいタブーの自己増殖という相互作用は、戦後日本の言語空間のなかで、おそらく依然として現在もなおつづけられているのである。》(p237～242 から)

以上の文章を読んで今でも続く言論の統制をどのようにしてすり抜け多くの日本人をはじめ世界中の人に伝えるかを深く深く考えた人たちがいたと思います。

作家の三島由紀夫(ノーベル文学賞候補者)はなぜ阿佐ヶ谷の自衛隊駐屯地で死ななければいけなかったのか、日本の国を憂いての行動は今の日本人には理解できないと思います。

死をもって伝えようとするのではなく漫画・アニメ・コスプレ・音楽・日本食を通して日本人の思い・感性・生き方・悪と呼ばれた者たちの心の中を世界中の人たちに「可愛い」をキーワードに伝えているのが今の日本人だと考えています。

ラブレターまで検閲されていた日本人が負ければ悪と呼ばれ、勝てば正義を振りかざす世界にどのように立ち向かってきたかを今の若者たちに知って欲しいと考えています。漫画やアニメが教科書にはならないと思いますが、子供たちは圧倒的に長い時間をアニメやゲームに費やしています。深い内容の漫画やアニメは世界中の子供たちに知らず知らずの内に影響を与えていると思います。

いま世界中の人が日本に観光旅行に来ています、その人たちを日本に呼び込んでいる力は漫画・アニメ・コスプレ・音楽・日本食・自然・文化・歴史そして一番大きいのが日本人の優しさイコール縄文人の魂(DNA)の力だと考えています。(小花利一郎 アニメ理科実験教室主宰)

●精神を他国に支配され続けるのはもうやめにしませんか

皆さんはテレビの報道や取材記者の言動に何かしらの偏りを感じる時はありませんか？今はインターネットにより個人が日本のメディア以外の情報源に触れる事ができる時代です。ネットや SNS のニュースで大きく報道されている事が大手マスコミでは扱われない、そんな状況を最近よく目にします。大手メディアの情報には何かしら公の圧力というか、国や行政が地域の治安維持のためか、ある程度の規制がかかっているようです。しかしその規制はなぜあるのでしょうか？またその情報は誰がどんな意図で報道しているか？を考えてみる必要がありそうです。

去年春から朗読会で読んでいた江藤淳の『閉ざされた言語空間』ではこの「検閲」がテーマです。検閲が大きな意味を持つのは、自国の利益を守り、敵に機密情報を漏らさぬよう徹底的な報道規制を敷き、国民の思想を監視する戦時下です。しかしこの本は戦時下ではなく、戦後日本の言葉空間の中に異様な閉塞感と虚構を感じた文芸家の江藤さんが、その違和感の正体を突き止めるべく米国に赴き、戦後米国が持ち帰った日本の検閲資料の中から米国が企てた占領下の日本への思想統制の過程と今も続くその影響を著したものです。

米国は1942年から1945年の間、自国に合衆国検閲局を作り自国民の郵便、電信電話、新聞、放送を徹底的に監視し続けました。米国の憲法修正第1条では「言論、および出版の自由を保障」とありますが、戦時下では実際には表現の自由はありませんでした。米検閲局は戦中、他国と連携し欧米亜三大陸にまたがる連合国検閲ネットワークを作り出し、日独両国への情報封鎖をします。その結果、原子爆弾製造機密は広島への原爆投下まで完全に封鎖されました。

戦勝国となった米国は敗戦国を占領し、平和を守るという名目で民間検閲局を作り検閲を始めます。特にアジア太平洋地域で勢力を伸ばした日本に対して米国は恐怖の念を抱き、戦前から続く日本人の思想を壊す事に注力しました。この先二度と日本が西洋の脅威となるほどの勢力を拡大するのを防ごうと、米国支配がしやすいよう新聞社や放送局のみならず民間の郵便にさえ検閲をかけ、反抗する者は排除しました。

私自身は戦後20年後に生まれ学生時代は教科書の歴史問題が取り沙汰され自国の歴史に誇りを持たなかった事や日本国の旗を掲げる事を学校で良しとしない風潮に違和感がありました。

戦中、確かにアジア各国に進出し支配したことで他国の方に辛い思いをさせた事は事実です。受け止め、謝るべき事は謝ります。しかし命ある限り自分は前を向いて生きていかななくてははいけません。

世界史を見れば、西欧の他国侵略の歴史は日本より遥かに長く重かったのも事実です。その西欧が先の大戦で我が国に勝ったからといって、わが国の歴史や思想を壊すべく、日本人が日本人である事に誇りを持たせないように思

想教育し、内部崩壊を画策したのは米国の戦略であった、とこの本には書いてあります。そして今もこの洗脳は続いていて日本人同士が反目しあう様になっているように感じていて、これは悲しい事です。子どもを持つ親としては、学校教育に対して占領軍が行った思想教育について今後もっと知って行きたいです。人によっては「国」にそれほどの愛着は持たなくて良い、という考え方もあるかもしれません。ただ海外の方と交流する際に感じるのは、私の知る国の人達は自国を大事に思い、残念だなど思う事はあっても、自国を恥ずかしいとは思っていないという事です。そんな人達の様子を見ると、自国を大切に思う気持ちは自分を大切に思う気持ちに似ているなど感じます。

黒船が来てまだ 200 年たってもいないのです。先人の働きで急激な西洋化を遂げた日本。80 年前の大戦の敗北を戒めとして、これからも米国や他国との協調は大切です。しかし精神を他国に支配され続けるのはもうやめにしませんか。2025 年、私は日本史を学び自国の良き所をひとつひとつ見つけて行きたいです。(飯田広子 補助員英語講師)

□『誰が第二次世界大戦を起こしたのか ～フーバー大統領「裏切られた自由」を読み解く～』

渡辺惣樹／草思社文庫

●意図的に起こしたのはルーズベルトとチャーチル

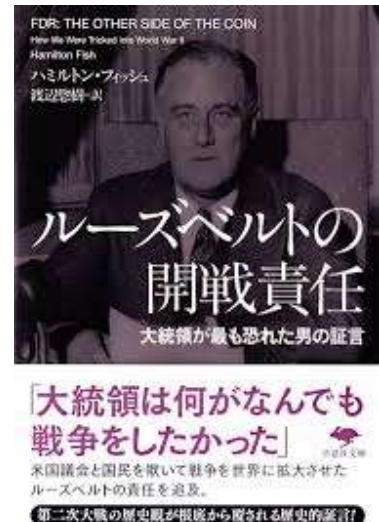
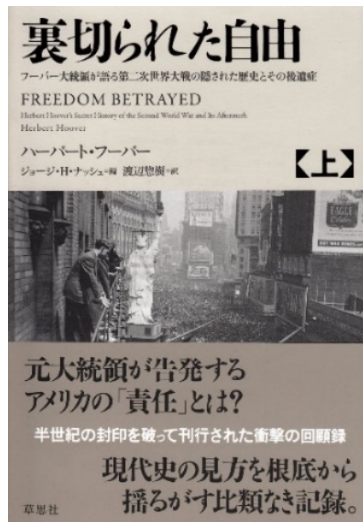
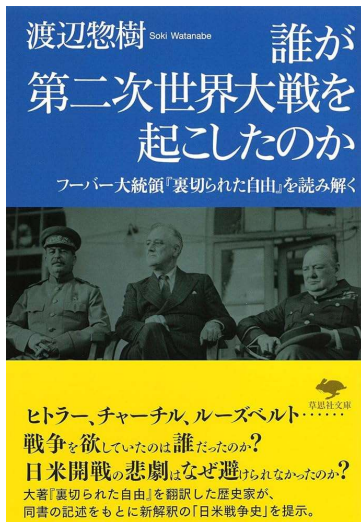
この間、沢山ではありませんが、数冊の本を読み、読み始めています。その一つは、読書会の『閉ざされた言語空間』にも関連しますが、渡辺惣樹著の『誰が第二次世界大戦を起こしたのか』です。これは、第二次世界大戦時のアメリカ大統領ルーズベルトの前の大統領フーバーが残した大著『裏切られた自由』の翻訳者の紹介書的な本です。アジアにおける日本の大東亜戦争とそれに先立って勃発していたヨーロッパにおけるドイツ(ナチス)との戦争第2次世界大戦を意図的に起こしたのは、アメリカ大統領ルーズベルトとイギリスのチャーチル首相であることの告発書です。膨大な資料(フーバー研究所:フーバーの母校であるスタンフォード大学にフーバーが設立したこの大戦に関する資料の蒐集)に基づくアメリカ(ルーズベルト)の告発書です。1964年フーバーが世を去ってから半世紀も経過した2011年に刊行されました。フーバーは20年もの年月をかけて原稿を完成していましたが、その時にもアメリカにはルーズベルトを支持する強力な勢力が存在したため、彼は生前に刊行することができず、彼の死後も遺族は刊行しなかったものです。それは、単にルーズベルトへの非難にとどまらず、アメリカの政策や戦争遂行が誤ったものであり、戦後の歴史上の事実を根底から覆し、現在の歴史認識を覆すものであるからです。それが、此の書籍の発刊がこれほど遅くなった理由でもありそうです。さて、これを読み終えた私は、フーバーの『裏切られた自由』を読みたくまりました。これは、大判のハードカバーで厚みが5センチ近くの上・下2冊本で、1冊が700頁を超える大作です(多くの注が含まれます)。その価格が1冊1万円近くもする高価な本であることもあって、逡巡しましたが、誘惑には抗えず、上巻を購入して読み始めました。フーバーの論述の仕方は、事実の指摘を客観的な資料に基づき主張する形式をとっています。「事実を持って語らせる」とはこのことでしょうか。身の保全を考えてのことでしょうか、「主観的な意見」であるとの批判をされることを極端に嫌っていることが読み取れます。第2次世界大戦の起こった実質的な理由は、第1次世界大戦の戦後を定めたヴェルサイユ条約にあることから書き起こされています。太平洋戦争(大東亜戦争)についても、日本に真珠湾攻撃を挙げるためにハルノート(ハル国務長官の日本に対する提案書)で日本が決して受け入れられない条件を突きつけ、解読済みの日本の暗号無線で、数週間前から日本の攻撃予定を知ったうえで、空母を始めとする重要は艦船を事前に退避、ハワイの陸軍と海軍の首席責任者2人だけには伏せて、その他、世界中の軍隊に対して、戦争準備を指令していた。そしてハワイの2人は責任を取らされて降格させられました。この2人の名誉回復がアメリカ議会でなされたのは、それぞれの死後であるつい最近ことです。その国会における審議に関する情報は、(公文書)情報公開法に規定にかかわらず、名誉回復決議から65年間の公開禁止とされました。終戦後4分の3世紀を経ても、この戦争の責任がアメリカにあること明らかにし、原子爆弾の投与と空襲による膨大な民間人を殺戮した根拠(アメリカの正当性)を失わせることは、アメリカの国益に反する重大な事実であるとされたのでしょうか。

フーバーの著作は、淡々と事実を資料で証明しながら、欧州戦争をダイナミックに説明している点で、大戦を新たな視点に読み解くことができるようです。下巻迄も読み終えるにはまだまだ時間がかかりそうです。

その他に、これに関連するものとしては、青柳武彦書『日本人を精神的武装解除するためにアメリカがねじ曲げた日本の歴史』を読みました。(歪められた言語空間を打ち砕く国際派学者による歴史認識の神髄)と言う副題が付けられています。同じ著者の『マッカーサーの呪い 永久革命の種』(WGIPが見事に浸透している日本)は現在読書中です。これらの青柳武彦氏の著作は、江藤淳の『閉ざされた言語空間』やフーバーの『裏切られた自由』が下敷きとなっていると思われる。マッカーサーが日本人に掛けた催眠術(WGIP:戦争責任情報プログラム:徹底的な検閲と言論弾圧及び偏向教育)から目覚めた論者が出てきた感じがします。その論調は、多分に感傷的ですが、押し付けられた「誤った歴史認識」からの解放を叫んでおります。それは、正に現在のロシアのウクライナ侵攻(侵略)やイスラエルのハマス攻撃にみる戦争が進行する世界情勢の中で、日本国(日本民族)が自衛権をどう考えるか、憲法改正に絡み「自衛隊」をどのように位置づけるかと

言う問題が突きつけられています。マッカーサーが2週間で作った「日本国憲法」と吉田茂(当時は外相)との闇取引の事実。私自身の歴史認識の変更を迫られています。憲法の解釈や改正論についても同様です。日本国憲法施行と同時(2ヶ月余)に生まれ育ち、進駐軍のWGIPの教育を受け、憲法を最高規範として構成される日本の法体系を学び、司法試験を経て、法律実務の世界で仕事として法律を扱ってきた自分、憲法9条を取り扱う事件処理はありませんでしたが、一貫した憲法解釈論の下で過ごした法律家の人生、自らの引退の時期を考えるこの時期に、どのように人生を総括したらいいのか、悩ましいこの頃です。(林史雄 弁護士)

図書紹介一覧:渡辺惣樹「誰が第二次世界大戦を起こしたか〜フーバー大統領「裏切られた自由」を読み解く〜」草思社文庫/ハミルトン・フィッシュ(渡辺惣樹:訳)「ルーズベルトの開戦責任」草思社文庫/青柳武彦「日本人を精神的武装解除するためにアメリカがねじ曲げた日本の歴史」ハート出版/青柳武彦「マッカーサーの呪い永久革命の種」ハート出版/西鋭夫・岡崎匡史「占領神話の崩壊」中公文庫



(月一回日曜)【石川塾 日本の歴史を知る朗読会】**無料です**

第19回: 1月12日(日) 石川塾 10:00~11:30

第20回: 2月16日(日) 石川塾 10:00~11:30

第21回: 3月9日(日) 石川塾 10:00~11:30

テキスト:江藤淳『閉ざされた言語空間〜占領軍の検閲と戦後日本〜』(文春文庫¥740)

どなたでも参加できます♪ 石川塾 TEL:042-710-5768



□『東條英機 歴史の証言』

～東京裁判宣誓供述書を読みとく～』

渡部昇一／祥伝社黄金文庫

●自衛のために已む無く戦った日本人に誇りを

『閉ざされた言語空間』と並行して本書『東條英機 歴史の証言～東京裁判宣誓供述書を読みとく～』を読んでいます。『閉ざされた言語空間』でも東條英機の裁判に関し一章を割いて触れていました。本書を読むまでの東條英機についての知識は、A 級戦犯で、日本の敗戦の戦犯であるということでした。しかし、ここでも学校で習ったこととまったく異なることが書かれていました。(以下p7より)

「日本は絹産業(蚕)以外には、固有の産物はほとんど無いのです。彼らは綿が無い、羊毛が無い、石油の産物が無い、錫がない、ゴムが無い。その他実に多くの原料が欠如している。そしてそれら一切のものがアジアの海域には存在していたのです。もしこれらの原料の供給を断ち切られたら、一千万から一千二百万の失業者が発生するであろうことを彼らは恐れていました。したがって彼らが戦争に飛び込んでいった動機は、大部分が安全保障の必要に迫られてのことだったのです。」(Their purpose, therefore, in going to war was largely dictated by security.)

これは東京裁判終結後の約二年半後に、アメリカ上院の軍事外交合同委員会(1951年5月3日)で、マッカーサーが発言した内容です。つまり、日本が真珠湾を奇襲してはじめた”侵略戦争”ではなく、国の”自衛戦争”だったということです。最初にこれを見たときは、どういふことなのだろうと混乱しました。学校の教科書では、日本がアメリカに仕掛けた戦争だと教えられたのに、日本の占領をした本部・GHQのリーダーであるマッカーサーが、日本が仕掛けたのではなく、自衛のためだと言ったということです。教科書もしくはマッカーサーのどちらかが間違っただけを言っています。本書を読み進めていくうちに、どうやら日本が仕掛けた戦争ではないということが分かりました。アメリカ、イギリス、オランダ、シナ(中国)が仕掛けた侵略戦争なのです(いわゆる ABCD 包囲網です)。特に、アメリカ、イギリスの政策・作戦が日本を戦争に追い込みました。わたしたちの住んでいる日本は、島国であり、石油など、資源・原料が少ない国です。そんな日本に対し、アメリカ・イギリスはあらゆる方法で苦しめてきました。

1939年7月、アメリカは日米通商航空条約を破棄しました。これにより、貿易は困難になりました。また、1940年7月にはルーズベルト大統領が対日石油・鉄くず・航空用ガソリン輸出許可制を発表しました。事実上の禁止であり、資源の少ない日本にとって大打撃でした。さらに1941年7月、アメリカは在米日本資産の凍結をしました。それに続いてイギリスの植民地を含めた日本資産凍結、日英通商航海条約破棄、蘭印日本資産凍結が行われました。さらに8月、アメリカの対日石油全面禁輸が始まりました。1940年の日本における軍需物資の輸入先は、機械類・鉄類・石油において、すべての分野で、6割から7割をアメリカが占めていました。そのアメリカから石油等の輸出禁止が行われたら、国として機能しなくなってしまうのは明らかです。

そのころ、日本は支那事変の最中でした。支那事変のきっかけである盧溝橋事件は、日本兵が撃ったのではなく、中国側でした。そもそも日本は軍事訓練をしていました。(p47)なんと支那事変にもアメリカは加担していたのです。経済的に攻撃するとどまらず、アメリカは軍事面でも間接的に攻撃してきました。1941年7月23日、ルーズベルトはアメリカ兵士100人、飛行機500機を与えています。また、アメリカ・イギリスは蒋介石へ支援を続けていました。蒋介石が抵抗できたのは、アメリカ・イギリスの支援があったからです。

とにかく、日本はこの支援ルートを通り切る必要がありました。そのルートを防ぐために行ったのが、仏印進駐です。これには、日本は事前に許可をとっていました。合意があったにもかかわらず、侵攻だと言われていたのです。このほかにもさまざまなことを特にアメリカ・イギリスは日本に対して仕掛けてきました。このようなことを仕掛けてきたアメリカ・イギリスこそ、いわば宣戦布告を仕掛けてきたのです。

また、まだまだ書いていませんが、軍備拡張などさまざまな挑発行為をしてきました。日本はこのような状況を改善すべく、幾度も重ねてアメリカと交渉をしてきました。日本は穏便にこのような状況を改善したかったのです。そんな中、交渉してきた内容をすべて白紙にするようなハルノートを送り付けてきたのです。それも、アメリカはこのハルノートの条件を飲めないことを分かっているが、日本に出してきました。アメリカ・イギリスが開戦したかったのであって、日本は交渉を繰り返してきたことからも分かるように開戦したくなかったのです。

日本は、このハルノートを送ったアメリカの最後の交渉(これ以上は意味がない)とし、開戦を決定しました。繰り返すことになりますが、アメリカ・イギリスの望んだ開戦なのです。石油の制限などによる物資の不足がありながらも、このまま侵攻されるのを防ぐべくして開戦をしたのです。よって、戦犯とされる東條英機、また日本に責任はなかったのです。それに、東條英機を裁いた東京裁判は国際法違反であり、講和条約締結前に戦犯として処刑するというのは、明らかな犯罪行為です。このようなことをもっと早く知っておきたかったなと思いました。本書を通して、日本人としての誇りを持ってました。今回、ここでは書き切れなかったことがたくさんあります。ぜひ、ご一読ください。(望月勇輝 高校一年生)

受験体験記(前編:中学受検編)

現在、石川塾のスタッフとして学習指導にあたり、小学生の頃石川塾に通っていた鈴木天羅先生が、都立中高一貫校の受検体験記を週刊「石川塾通信」に隔週、5回にわたり連載しました。今回本誌「千の声」に一挙掲載します！ 僕(望月)も今回編集して、参考になることばかりでした！ ぜひ、ご一読・再読ください！

～桜修館中等教育学校(合格)～立教大学観光学部(合格)～

「ボクが学んだこと① 石川塾との出会い」 T.S.

これから隔週にわたって、現役大学生で現在石川塾の講師を勤めている私・鈴木の中学入試と大学入試の体験記を連載していきます。はじめにお断りいたしますが、僕の体験記はあくまでも僕だけの体験です。「こういう勉強をした」「こういう生活を送っていた」ということを記述しますが、「こうした方がいい、こうすべきだ」という考えは毛頭ありませんので、“受験日記”みたいな感覚で読んでいただくと幸いです。

さて、私が石川塾に出会ったのは今から10年前になります。当時私は小学4年生でしたから、今指導している生徒たちの多くはまだ生まれてすらいません。石川塾に入る前から私は、ぼんやりとはありますが中学入試を視野に入れていて、それがきっかけで母が石川塾を勧めてくれたのです。中学入試を考え始めたのは小学2年生の頃。テレビの「高校生クイズ」で東京の開成高校が優勝したのを見て、かっこいいなと思ったからです。それをきっかけに「頭がいい学校に入ってあの高校生みたいになりたい」と進学校への憧れを抱くようになりました。

当時の石川塾のカリキュラムは今とあまり変わっていません。変わったのは連絡帳とカラーコピーが導入されたくらいです。はじめに朗読暗唱をやり、百マス計算をしてそのあとは「嵐の中の灯台」「理想の国語教科書」を使った要旨要約をこなしました。そう、要旨要約といえば「100字ピックアップ」というカリキュラムもありました。読売こども新聞等を購読して、その中から気になったニュースを100字でまとめるというものです。そういえばここに戻ってきてからこれを行っている生徒さんは見ていませんね。結構難しいのですよ。その他にも、齋藤孝の「国語力シリーズ」で国語の文章題を解きました。文中から手がかりとなる部分を見つけて答えを導く力をつける課題なのですが、これが後になって大学入試のときに役立つのです。今嫌々やっている生徒の皆さん、よく覚えておいてくださいね？(笑)

石川塾でやったカリキュラムによる成長は、これまで通った塾で学んだどんなものよりも大きなものだと思っています。一見単純そうに見える朗読暗唱や百マス計算も、今になって考えるととても重要な力を養成するものなのです。基礎ほど大事なものは無いんだと今になって理解できます。

まず朗読暗唱ですが、単純にものを覚える力がつくだけではなくその文章への知識も深めることができ、教養が身に着きます。例えば「平家物語」や「枕草子」などは中学の古文の授業でも取り扱う文章です。石川塾の朗読暗唱でその文の暗記や内容把握をしていれば、「あ、これ石川塾でやったなあ」「そうそう、こういう文章だったよね」と思い出して周りの誰よりも早く文を理解することができます。また、大人になったときでも会話のネタや知識披露で他人から一目置かれるようになります。「そんなモノ必要あるの？」と思うかもしれませんが、意外と使えます。社会に出てまだ少ししか経っていないひよっこが言うのもなんですが、社会に出ると年長者と関わるシチュエーションが必ずあります。そこで自身の教養の良さを披露すれば「この子頭いいな」「そんなこと知ってるんだ、すごいなあ」と思われて、その人との人間関係が上手いくことがあります。朗読暗唱は人生における“予習”になるのです。

百マス計算に関しては、多くの生徒さんが「ムダ」と思っているかもしれません。今やスマホの電卓機能でポチポチやれば答えが出る世の中ですからね。しかしこれが学校の数学のテスト、高校・大学入試の場だとしましょう。電卓は使えません。大きな数字から小さな数字まで、全部自分で計算しなければいけません。そこで問われるのが「スピード力」と「集中力」です。計算を素早く行わないと制限時間内に問題を終わることができません。日々石川先生から容赦なく「スピード」と「集中」を叩き込まれているのは、こういった試験の場で無駄なく正確に計算をすることがとても重要だからです。

「教養」「スピード力」「集中力」を鍛えることができたのは、ここでの大きな成果です。元々私は計算のできる子だったのですが、いかんせん集中が長続きせずに問題を一つ解くのに結構な時間を費やしていました。今や「世間では名の通る大学」の学生ですが、10年前は今現在いる生徒と同じような状況でした。しかし石川塾の授業を経て、1～2時間は持続できる集中力と文系知識を得ることができました。石川塾でこれらを養っていなければ、今の私はいないでしょう。皆さんも石川塾でこの3つの力をしっかり身につけることができたならば、私と同じ、いや、私よりも上に行く大学生になれる…はずですよ。

さて今回は石川塾での思い出や成果話に終始しましたが、次回から本格的に「桜修館中等教育学校」及び「立教大学観光学部」の受験奮闘記を綴っていきたいと思います。次回もどうぞよろしく願いいたします！！

「ボクが学んだこと② 都立中高一貫校との出会い」

今回から僕の人生最初の関門である中学入試についてお話します。この入試は今後の進路や方向性に大きく関わった大イベントでもあります。中学入試を検討している生徒とその保護者の方々にとって有益な情報となるかは定かではありませんが、経験者としてこれから何回かに渡って記していこうと思います。

中学受験のきっかけである開成高校は開成中学との中高一貫校でした。中高一貫校とは、中学と高校が一つになっていて、中学に入ると自動的に高校に進学できるというシステムを持つ学校のことです。中には進級試験を挟むところもありますが、基本的にはエスカレーター式のため、高校入試をする必要が無くお得な学校なのです。楽をしたかったわけではありませんが、せつかくなら6年間同じ学校で過ごして大学入試に備えたいという思いもあり、中学入試の志望は中高一貫校に絞られました。その頃、母から一冊の教育雑誌をもらいました。内容は中高一貫校の特集でした。首都圏の様々な中高一貫校が紹介されている中、運命の文字がそこにはありました。

「**都立中高一貫校**」、東京都(当時都知事の石原慎太郎さん)が率先してつくった中高一貫校の総称で、当時はまだ歴史が浅く進学校の新鋭として注目されていました。多くの中高一貫校が“私立”である中、これらの学校は“都立”つまり公立でした。公立であることによってどんなメリットが生じるかというと、それはズバリ「**学費の安さ**」です。公立学校と同じくらいの学費で6年間同じ学び舎に通うことができるのです。言い方は悪いですが、そこら辺の普通の学校の学費でハイレベルな教育を受けられるということです。それゆえに人気が高く、開校したての頃の入試倍率は8とか9とかという数字でした。「**倍率が高いが、安い学費で高水準のカリキュラムがある**」、これはお世辞にも裕福ではない僕の家にとって最高の場所でした。私立校に深い思い入れは無かったので、颯爽と都立中高一貫校の受験を決意しました。とは言え当時僕は小学5年生、これまでの決断の中で最も大きく重要なものでした。

その秋、両親と様々な都立中高一貫校の文化祭を見物しました。校内の様子や生徒の雰囲気確かめるためです。中でも当時興味を持っていたのは小石川でした。小石川はSSH(Super Science High-school)に指定されている理系学校で、都立中高一貫校の中でもハイレベルクラスの学校です。“当時の”僕は科学教室にも通っていたほどの科学少年で、「中学は理科に強い所へ」なんて考えていました。文京区にある校舎は大きく、教室もきれいで清潔感ある場所だったと記憶しています。科学部のワークショップも面白く、「ここは良いな」と思いました。

一方で、そんな小石川にも負けず劣らず魅力的な学校がありました。それがのちの我が母校・桜修館中等教育学校です。元々は都立大学付属高校という名前で、中学から大学まで目黒区の八雲に集結していました。それが数十年前の多摩地域移転ブームで大学のキャンパスが現在の南大沢に移転、そして残された付属中高も2005年に桜修館という名で引き継がれることとなり、2011年に完全吸収されたという歴史があります。付属中高から引き継いだ校舎は八雲ののどかな高級住宅街に囲まれており、山の手の大都会にある小石川とは正反対な立地です。そしてここは「自由と自治」という校風のもと、生徒が主体となって行事や運営を行う「リーダーシップ育成」の学校でした。

キャラクターの異なる両校ですが、受験をするならばどちらか一つに絞らなければなりません。都立中高一貫校の受験日はみな同じ2月3日、一度に複数の学校を受験することはできないのです。小石川か、桜修館か。まるでアメリカの大統領選のような二択問題、これを制したのは言わずもがなですが、桜修館でした。

決断材料はいたってミーハー的なものでした。まず一つは学校まで「**たくさんの電車に乗れるから**」です。学校の最寄り駅である都立大学駅まで3回の乗り換えが必要で、普通の神経なら敬遠するような環境ですが僕は違いました。僕は小さい頃からの鉄道好きで、電車に乗って出かけるのが大好きな子供でした。そんな子が「毎日電車に乗って通う」と言われたらそれは狂喜乱舞ものです。乗り換えなど苦ではなく、むしろご褒美です。そしてもう一つが「**弓道部の存在**」でした。桜修館には弓道部があり、毎年のように全国大会に出場している強豪校です。文化祭でもその珍しい弓道部を見学、**在校生の凛とした姿を見て「カッコいい！！ここ入りてー！！」**とイチコロになったのです。

かくして僕の入試の方針は決まりました。もともと、最終的に桜修館受験を決めたのはもった後の話ですが、一応の第一希望は桜修館となりました。思えばこの時から僕の理系精神は消え始めていたのでしょうか。次回は都立中高一貫校の入試スタイルと対策について触れながら話を進めていこうと思います。では、また。

「ボクが学んだこと③ やる気が一番！ひたすら解く！」

都立中高一貫校の受験スタイルと対策

受験体験記も3回目を迎えました。まだ中学受験の段階でこんなに回を重ねていて、大学受験まで完結するのに一体どれだけ時間がかかるのでしょうか？ともかく、今回は宣言通り都立中高一貫校の独特な受験スタイルと大まかな対策(?)を述べたいと思います。

都立中高一貫校の入学試験は「**適性検査**」と呼ばれるもので行われます。読んで字のごとく、「うちの学校に適している人間」かどうかを検査する試験です。この適性検査ですが、一般的に目にする中学受験の試験とはスタイルが大きく異なります。一般的な入試問題といえば、算数の捻った文章問題とか、長い随筆や小説を読んで筆者が言いたい

ことや登場人物の心情などを問われる問題が出題され、そのほとんどがマークシート式・・・なのでしょうか？私立校を受けたことがないので分かりません。しかし、適性検査は違います。そもそも教科で分けることはしません。

適性検査は、一般的に**適性検査Ⅰ**と**適性検査Ⅱ**に分かれています。学校によってはⅢもあるのですが、多くの学校は2つに分けています。**試験時間はそれぞれ45分**、 $45分 \times 2 = 90分$ で行われます。**Ⅰはいわゆる国語**。長文や複数の文章を読んで筆者の主張または複数の文章に共通する or 違う点を説明し、さらにそれに対する自分の考えを大体300~400字で説明します。そう、Ⅰは「作文」なのです。この時点で一般的な受験とは大きく異なります。読解力だけではなく、自分の意見を考える力とそれを文章化する力、総合的な国語力が問われます。

そして**Ⅱですが、これは算数、理科、社会の総合問題**です。問題形式は例年大問1が算数、2が社会、3が理科系といった感じです。Ⅰが作文であったように、**Ⅱも論述で答えていくスタイル**です。例えば大問2に年を隔てた「農作物の生産量のデータ」があったとします。そして「それぞれの農作物の生産量はこの年とこの年とでどのように変化したのでしょうか」と問われます。そうしたら受検生は「○○は何倍に増加して△△は何%減少して・・・」というようにそれぞれの農作物の増減を“詳しく”説明していく必要があります。ただ減った・増えただけでは不合格、さよならです。定量的にどう変化したのかを説明するためにちまちま計算して何%減ったか増えたかを求めていくのです。社会系の問題といえども、素早く正確な計算能力と分析力が試されます。

どうでしょう？大体のイメージを掴んでいただけたでしょうか。適性検査は何よりも「**分析力(読解力)**」と「**文章力**」が問われます。問題文を読んでなんとなく分かっただけでは受かりません。そして読解や分析で得た情報を「初めて問題を見る人にも分かるように」説明しなければいけません。これは受検生時代に何度も言われてきました。もちろん指定字数に満たないのは論外です。最大字数をオーバーするのも同様です。問題の指示に従えない人は学校には不要です。多くても少なくともダメ、「**過不足なく書く**」ことが求められるのです。そして最重要項目は「**時間内に解く**」ことです。試験時間はそれぞれ45分、小学校の授業1コマ分で受検生にとっては長いと感じてしまうかもしれませんが、全ての問題が論述式なので相当時間は厳しいです。先ほども申し上げましたが、Ⅱのほとんどの問題は解答に計算を要します。**45分内で計算をして詳しく文を書く**、大人でも難しい試験です。上記の太字で書いたことを成せない受検生はことごとく落とされます。自分でも珍しく厳しい言葉を書いちゃいましたが、それほど都立中高一貫校の受検はハードなのです。自分が受検した2017年度は男女900人以上が応募し、そのうち合格したのはたった160人でした。バーツと簡単に書いてますが、適性検査はそんな簡単には突破できません。ではどうしたら合格に近づけるのでしょうか？

それは「**問題をひたすら解く**」ことです。年々問題に変化はあるとはいえ、求められている力は基本的に変わりません。問題をひたすら解いて、傾向と正しい答え方を掴んでいきましょう。近年の中高一貫校ブームで適性検査対策の参考書や問題集も多々出版されるようになりました。さすがに最初から過去問を解くのはきついで、問題集で型と流れを身につけてから過去問を解きまくるのがいいでしょう。ちなみに僕は12月頃から過去問を解き始めました。過去問は志望学校に拘らず色々な学校の問題を解きましょう。どこの学校も問題の型や問われるものは近似しています。演習量は多いに越したことはありません。

そして**僕が一番大事だと思うものは「やる気」**です。やる気とはもちろん受検する小学生のやる気です。根性論を振りかざすつもりはありませんが、やる気がない人は絶対に受かりません。どんなに親御さんが熱心に勧めても、どんなにいい塾に行かせていいものをお膳立てしても本人のやる気が無ければそれはただの「記念受検」として水泡に帰します。本気でその学校に行きたいと思って懸命に勉強した生徒ですらふるい落とされる世界ですから、嫌々やって生半可に身につけたスキルでは到底適うはずがありません。よく「**逆転合格**」とか言われますが、**本気で取り組む**からこそ逆転できるのです。これは高校・大学受験でも一緒です。

対策と演習で型を身につける。そして受験生本人がやる気を持って取り組む。これが受検態勢のキホンとなります。まだ色々と言いたいことがあるのですが・・・、今回はここまでになりそうです。「**過不足なく書く**」というのは実に難しいことなんですね。

「ボクが学んだこと④ 5W1Hのツッコミと“なぜなぜ”」

中学受検生時代の生活

第3回を投稿してから結構な時間が経ってしまいました。自分でも今まで何を書いていたのかすっかり忘れてしまいました。今しがた第3回の内容を復習してきましたので、その時の話も踏まえて今回は受検生時代の生活について“記憶の限り”お話いたします。

小学5年生の2月から某大手都立中高一貫校の受検対策塾に入塾しました。ここから約1年間の受検生生活が始まります。2~3月は週2、3で基本のキの授業しかありませんでしたが、6年生に入ってから週4でみっちり講義を受けました。午後3時に学校が終わり、一旦家に戻っておやつ、4時半に家を出て5時頃の授業に臨む・・・というのが平日のルーティーンでした。塾の授業は一日2時間半、作文(適性検査Ⅰ)・理系・文系(いずれも適性検査Ⅱ)と作文演習の4授業があり、(現在のカリキュラムとは齟齬があるかもしれませんが)一日一科目といった感じだったのを記憶してい

ます。しかし受検生とはいえ、所詮小学生です。学校終わりの2時間半のスパルタは当時の僕にとっては全く大変な生活でした。時には授業中にウトウトしてしまい、先生に注意されることもあり。夏になると同じ志望校の他校生と一緒に昼から夜まで授業を受けたり、山奥での合宿や模試の猛攻を受けたりしました。こう綴るとまるで根性論叩き込み塾にいたようにとらえられそうですが、カリキュラムや入試問題の分析・解説は非常に理論的・的を射たもので、特に本番直前の特訓授業で頂いたアドバイスはめっちゃくちゃありがたいものでした。あのアドバイスは僕の人生とあの塾のターニングポイントだと思っているのですが、それはまたいつか。

さて話題を前回僕が書いた事柄へ移りましょう。前回僕は適性検査対策として「**過不足なく書く**」「**定量的に説明する**」ことを挙げましたが、「そんなのいきなり身に着くわけじゃない！！」というお声が聞こえました(そんな気がただけ)ので、**一つ僕の家で実践していた“特訓”をお教えします。それは「5W1H ツッコミ」です。**日常生活においてお子さんと親御さんとで会話をすることがたくさんあると思いますが、皆さんは普段どんな話をお子さんから聞きますか？例えば「先生がね、言ってたんだけど…」と学校で先生から何かお話があったのだろうと思われる話を切り出したとします。そうすると我が家(主に母)ではこう言われます。「いつ？」「どこで？」「誰に？」と。先の切り出しを見ると、明らかに主語や目的語が抜けています。いかにも子供らしい話しっぷりですが、我が家ではこんなものは許されません。いつ、どこで、誰が、何を、どうした、を明確に話さないと決まってツッコミを喰らいます。せっかくお子さんが話しかけてくれたところを猛ツッコミするのは確かに酷なことかもしれません。しかしこれが「過不足なく書く」「定量的に説明する」ことに繋がります。日常会話で相手に伝わる話し方をしないと、本番で上手く説明することなんてできません。ましてや受検では「問題を知らない人に説明する」ことが重要視されます。「これくらい察してよ」は通用しません。相手に「何が？」「どのくらい？」とツッコまれない文章を書けるようにするには、日々ツッコまなければ身に付きません。少し道が逸れますが、日本人特有の「察して文化」に僕が嫌悪感を抱くのは、もしかしたら受検生時代に喰らった「5W1H ツッコミ」のせいかもしれないと今思っています…。

さらに受検生には定期的に塾内テストや模試があります。その成績・答案が返された時、**我が家でやっていた振り返り方法をお教えします。それは「なぜなぜ」です。**「なぜなぜ」とは、ひと昔前に多くの企業で流行った(と言われる)「なぜなぜ分析」です。起こった事象に対して「なぜ起こったのか」を考える、原因がわかったら「なぜそういう原因があったのか」、「なぜそのような状態にあったのか」、「なぜ」「なぜ」「なぜ」…という感じで5回の「なぜ」を追及します。僕は小学生から今に至るまで、母の「なぜなぜ」を喰らいました。「なぜ模試でこのような成績になったのか」「なぜこの点数が悪いのか」「なぜ解けなかったのか」「なぜ時間が足りなかったのか」と。説明したら「なぜ」、それを説明しても「なぜ」と言われるので、メンタルが弱いと潰れるような「なぜなぜ」でした。しかし「なぜ」を繰り返すことで自分の弱点やその時やらかした根本的原因を突き詰めることができ、次回への対策に繋がります。**振り返り無くて成長はありません。**

塾では昼夜を問わずの猛特訓、家ではツッコミと追及の嵐、と考ただけで地獄のような生活を送っていたわけですが、そうでもやらないと受からないのが適性検査。前回僕が「本人のやる気が一番」と言ったのは、こういう生活が1年間続くからです。僕も「こんな生活を経ても受かりたい、行きたい」という心持が無ければあの学校に受かることも無かったし、ましてや受検生生活自体継続できたかどうか分かりません。入試対策や問題解答は理論で勝負できますが、**受検自体は大変な体力勝負・忍耐勝負の根性論に変わりはない**ということは最後にお伝えしたいと思います。では区切りがいいので今回はここまで。最後までお読みくださり、ありがとうございました！！

「ボクが学んだこと⑤ 本番！入試前後の話」

さて長々と続いた都立中高一貫校受検のお話も今回で一区切りです。受検対策についてまだまだ話し足りないところがあるのですが、これはあくまでも受験体験記ですので、ここで中学入試編はおしまいにしようと思います。そこで今回は、受検本番前後の裏話についてお話します。今までの話の中で最も個人差の出る内容かとは思いますが、何かの参考になれば幸いです。

1月、正月の初詣はさることながら、とある**神社に参拝**をしました。その神社とは上野公園不忍池の近くにある湯島天神です。ここは学問の神様・菅原道真公を祀っていて、毎年多くの受験生や資格試験前の人たちがご利益をもらいに参拝します。菅原道真公と言えば梅、ということもあって境内には梅の木がたくさん植えられています。しかし見頃がちょうど2月なのでこの日は梅の花は見れませんでした。花が2月に咲くのは、きっと受検に成功して「おかげ参り」してきた人にきれいな花を見せたいがためなのでしょう。必ずここで梅の花を見るぞと決意し5円玉を投入、そのあと牛の銅像の頭を撫でて更なる祈願をしました。みんながみんな頭を撫でるので、牛の頭は完全にツルツルになっていました。参拝後は近所にある「十八割蕎麦屋」という蕎麦屋が出している**「合格そば」を食べました。**そばの上に金粉が乗っていて見た目もゴージャスでした。このお店は現在春日部の郊外にあります。

2月になると、本番までもう2日しかありません。ひたすら塾の直前特訓に通います。その際先生からこんな予想が。**「今年の適性検査Ⅰでは文章が出るだろう」と。**通年当校の適性検査Ⅰでは絵や写真を提示して文を書かせていたのですが、今年は初めてその殻を破るだろうと言ったのです。そこで受講生たちは短い文章を提示された問題を解き続けました。例年と違うものを出すかもしれない。塾にとっても僕たちにとっても緊張感のある2日間でした。

そして受検本番。早朝に起き態勢を整えます。リュックには湯島天神で買ったお守り4つ、父が筑波山で買ってくれたお守り1つ、近所の神社のお守りいくつか、総じて**9つのお守りをつけ**ました。傍から見れば完全に神頼みな受験生に見えたことでしょう(笑)。さあ本番、まずは適性検査Ⅰです。直前に言われた「文章が出る」の言葉、この真偽を証明する時が来ました。問題用紙が配布され、紙越しにうっすらと見える情報を覗きました。絵や写真は見えません。文です！！**塾の読みは大当たりでした**。まだ試験は開始されていないというのに、私は既に**小さくガッツポーズ**を机の下でとっていました。先生の予想に感謝です。45分、しっかり書ききりました。適性検査Ⅱでは自分の得意な大問2から始め、次に1→3と解きました。計算ミスはないか、問われていることとずれていないか、過不足なく書けているか、入念にチェックしながら解き進めていきます。よくこの作業を45分の中でやれたものだといふ今でもかつての自分に感心してしまいます。

受検後、9日の結果発表までの6日間は平静に過ごしました。結果が気になることもありましたが、1年間の努力をねぎらうのに時間を使いました。読みたかった「封印本」を読み漁り、とにかくやりたいことをやりました。振り返りの時間はほとんどありませんでした。模試と違って1年に何度もあるわけではありませんし、それにもう終わったことですのでそこは割り切りました。受検直後で何かと後ろめたい気持ちが親御さんにもお子さんにもあるかと思いますが、まずは1年間戦い抜いたお子さんを褒めてあげてください。お子さんもこれまでのストレスを存分に解消してください。

そして運命の日、2月9日。この日は少々の雨が降っていました。果してこれがどっちの“涙雨”になるやら、極度の緊張が襲います。学校の校門近くの駐車場スペースに合格者受検番号が掲示されていました。僕は頭の古い人間なのか、受験の合格発表と聞いて白いプラカードや看板にずらーっと番号が並んでいるのを想像していました。しかし実際には段ボールに番号を印刷した白い感熱紙を貼り付けただけのものだったので、少しがっかりしました。そんなことはともかく、印刷された番号から**自分の受験番号**を探します。それは男子枠の列の真ん中ほどにありました。**見つけた瞬間、持っていた折り畳み傘を放り投げて絶叫しました**。周りに他の受験生がいなくてよかったと思っています(笑)。かくして、僕の都立中高一貫校受検は最高の形で幕を閉じました。約5倍という倍率を乗り越え、見事花を咲かせました。

それでは最後にもう一ネタ。この受検にあたって、**合格の晩にはスマートフォン**の購入が確約されていました。今の小学生にとっては信じられないようなことでしょうか、僕たちの時代では小学生がスマホを持つなんてことは(多分)ありえない話でした。4つ上の姉でさえも、スマホを持ち始めたのは中学校2年生くらいの頃です。持っているのはせいぜいメールや電話機能しかない子供ケータイ。適当な文字を打ったり、待ち受け画面の設定をいじったりするのが僅かな楽しみで、**「なんとか受かってスマホを手に入れてやる」**と意気込んでいました。スマホを持つことが当たり前になった今のお子さんは、僕が経験した受検生活が想像できるだろうか……と子どもたちに少し嫌がられそうなことを言っ(いわゆる「老害ムーブ」)中学受検編を締めたいと思います(笑)。(鈴木天羅 大学二年生)

◎大学入試共通テスト♥国語の24,060字を読解する力

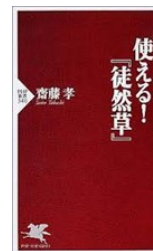
～大人気♥石川塾名物要旨要約講座、いつからでも始められます。

●『理想の国語教科書』(齋藤孝/文藝春秋) ※青版/赤版/緑版
40字程度に「～が～をする話」または「～が～になる話」にまとめる。

さらに本文をそのまま抜書きして200字でまとめる。

●『使える!「徒然草」』(齋藤孝/PHP新書)

一編を400字詰原稿用紙4～8枚程度にまとめる。



◎個別作文・小論文指導

～毎年合格者を出す石川塾の名物授業です～

高校受験、大学受験の推薦入試を利用する生徒に対し、個別に対策指導しています。

公立中高一貫校受験対策として、適性検査の作文指導もしています。

型を習得し、自身と向き合い自分の言葉で表現できるよう何度も練習します。

他と差をつける作文が書けるようになります♥

<<千の声 VOICE>>

口夫婦で行く「日本百名山」完登を目指して

～100 座目「空木岳(2864m)」登頂ならず！ 残念ではあるが・・・～

2023 年 10 月 1 日～3日

10月2日(月)晴れ

ホテル発 5:35→駒ヶ根スキー場駐車場 5:45～6:00→林道終点 7:20～7:35→池山小屋分岐 8:50～9:00→マセナギ 10:40→迷い尾根 12:30～12:50→空木平分岐 15:20～15:45→空木平避難小屋 16:10(泊)

登山口から山頂まで7～8時間、頂上直下の駒峰ヒュッテに泊まる計画で歩き始めたが予想以上に時間と体力を費やし残り登り260m、コースタイム65分という駒峰ヒュッテを諦め、下り15分の空木平避難小屋に文字通り避難した恰好となった。駒峰ヒュッテは管理人が居るとはいえ自炊である為避難小屋でも大差なしと考え、早く荷を降ろしてゆっくり休み明日へ備えようと判断したのである。

空木平避難小屋に 16:10 着く。小屋には単独行の男性2名が夕食の支度をしているところであった。小屋内は通路を挟んで左右一段上りの板敷きとなっていて其々8～10人、詰めれば計20人ほど収容できそうである。トイレは一度外に出て裏側に回った所にあり、水は小屋から30mほどのテン場に行く途中の沢で汲む事ができた。二人のスペースを確保し汗で濡れたアンダーウェアを着替え、湯を沸かしコーヒーでやっと落ち着くことができた。17時半、先客の二人は夕食を済ませ寝る用意をし始めたので我々も夕食を済ませ寝る準備に取り掛かる。寝袋は借りつもりで装備から外し、いつも持つてくるペフシート(断熱シート:巾500×長さ1800×厚10×重さ280g)は忘れてきてしまった。極力重量を抑えることと小屋泊まりであることから、寝具としては薄いナイロン製のシュラフカバー、長袖フリースシャツとゴアテックス雨具上下でいけると考えていた。今晚はかなり冷え込んでいて寒い。幸い小屋にはペフシートとチャックの壊れた夏用シュラフ各1枚が放置されていたので使わせてもらう。寒さで中々寝付けず21時頃二人でトイレに行く、外は星空で明日の好天が期待できるが冷たい強風ですっかり冷え切ってしまい、寝床に戻って横になるも強烈な寒さでガタガタと震えが止まらない。気温は4℃くらいであろうか寒さと風の音で疲れているのに中々寝付けない。夜中12時を過ぎてもまだ眠れない、低体温症が頭をよぎる。明日の事を考える、4日水曜日用事がありどうしても帰らなくてはならない。寒さと眠れないことでの体力消耗と不安で戦意は無くなり100名山100座目登頂願望は意識の中で薄らいでゆく。岩場、ハシゴ、鎖場の続くヤセ尾根を無事下山しなくてはならないという想いで二人の意見が一致、それなら登頂を断念し下山する方が良いと決めた。

10月3日(火)晴れ

起床 6:00 空木避難小屋発 7:45→空木平分岐 8:15→迷い尾根 10:05→マセナギ 11:50→池山小屋分岐 13:00→林道終点 14:20→スキー駐車場 16:00→こまくさの湯 16:30～17:50→自宅 21:30

予想通りの青天で夜遠し吹いていた風も止み絶好の登山日和である。多少の未練はあったが気持ちは吹っ切れていた。ゆっくりと朝食をとり7:45頂上へ向かう単独行の男性と別れ空木平分岐へと向かう。コースタイム15分のところ30分掛かって分岐を通過する。マセナギまで2時間50分を3時間35分、マセナギ→池山小屋分岐は30分を1時間10分、小屋分岐→林道終点まで45分を1時間20分、林道終点→駐車場まで1時間10分を1時間40分とコースタイム5時間10分を約8時間かけて下りて来た。途中ヤセ尾根で帽子が落ちていてその地点から登山者



下山の朝 避難小屋より空木岳山頂を望む

が滑落したらしく池山小屋分岐あたりで3名の先発救助隊とすれ違い、林道終点の駐車場でこれから救助に向かう準備をしている3名と出会う。これから現場まで2時間はかかる、日も暮れるから大変な救助活動となるのを百も承知で行く彼らに頭が下がる。何とか無事に救助される事を願った。暮れかかった駐車場で後に日帰り温泉「こまくさの湯」で汗を流し帰途についた。今回の山行は当初8月28日(月)～30日(水)の予定であったが前日27日に発熱、セキがひどく二人でコロナに感染し急遽取止めた。9月中頃を次に設定したが都合が付かず夏山装備で行けるギリギリの10月初めとなった。夏山軽装備に拘ったのは体力の衰えを心配したからである。9月中頃から暖かい日が続き、

空木岳標高 2000~3000mの最低気温も8℃~10℃前後であった。しかし9月末の週になり急に寒くなり気温も4℃~6℃と下がったが天気予報は2日、3日と快晴で山頂直下の駒峰ヒュッテで寝袋を借りれば夏山装備で問題ないと判断した。結果は前述した通り寒さにやられた。下山日に聞いた話だがが予定していた駒峰ヒュッテはストーブを焚いていて人も多く暖かったらしい。一番大事な100座目に登頂できなかった事は残念ではあるが不思議と心は満たされ穏やかである。(土屋哲彦80歳・久三恵夫妻)

石川塾長 おすすめの本

●新井紀子さんの本と高橋一雄さんの本



●今井むつみさんの本



新春

塾生募集

新しいクラスを開講します

石川塾はことばの力と考える力を育てます

ことばの力は考える力に働きかけます

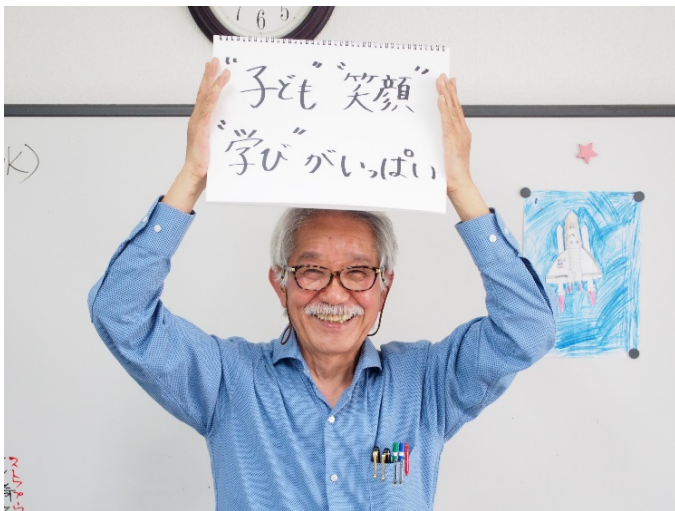
考える力はことばの力によって育ちます

ことばの力と考える力によって

読解力が育ち

思考力(問題解決能力)と学力がアップします

石川塾長 ↓



「基礎的読解力は人生を左右します」
「社会世界への選択肢が広がります」
「大学の学力差は読解力の差です」
「読解力は意味を理解する力文脈を読み取る力です」
「読み解く力は小さいときから学習できます」
「トレーニングで読解力のスキルは身につきます」
「自分の将来は自分で切り開くことができます」
「ハッピーになれます」

「大人社会人講座もあります」
「本を貸し出している塾です」
「ホームページも御覧ください」



読み書き算数 石川塾

〒194-0021

町田市中町 1-30-8

TEL: 042-710-5768

小田急線町田駅北口から8分
～りそな銀行～河合塾～シバヒロ交番前～信号渡る
～林歯科から3軒目～(町高通り町田税務署手前)
レンガ造り3階建ビル2階(菅井町田ビル)



自転車置き場あります

ワクワク・ワイワイ友と学び習う石川塾

- ◎(ちいさいときから)絵本の読み聞かせ～子どもと代り番こに読んだりしながら～やがて自分一人で読めるようになり～ことばがふえ～ことばで考える力が育ちます
- ◎学校の教科書を自分で読めるようにわかるように<ことばの力と考える力>を育てます
- ◎本をたくさん読み「あらすじ」を書きます(だれが・なにを・したのか/いつ・どこで・どのように)「あらすじ」を人に語りノートにまとめます
- ◎ひとつにはいろいろのものを「はかり」ます【例えば:円いものの周りをはかり直径をはかり円周率<円周÷直径>を出します/円周率<3.14>はどうして3より大きくて4より小さいのか? (2003年の東京大学入試問題「円周率が3.05よりも大きくなることを証明せよ」にチャレンジします)】
- ◎ほかに<割算・分数・割合・率・比>の「関係・仕組」を言葉と図と式で解き明かします
- ◎朗読したり演説したり歌を歌ったり体を揺さぶり人に伝え「人を動かす」スピーキング(英語)とライティング(英文)の練習をします
- ◎知りたいことを「調べてみよう、書いてみよう」ノンフィクション部門に応募します

文章が読める! 書ける!! 受験コース!!! 石川塾の公立中高一貫校受検対策

昨今中高一貫校への進学が注目されていますが、その中でも「公立中高一貫校」の受検スタイルは独特です。文章や図、グラフを読み取り、そこから自分の考えや分析結果を“文章にして”答えさせます。つまり、「文章を読む力、書く力」が必要になるのです。一見難しそうに見える公立中高一貫校の受検ですが、逆にその力さえ身につければ、難関校でも合格は可能です!!

私は小学5年生まで石川塾に通い「読む力・書く力」を身につけ、そののち大手受検対策塾に通い、志望校に合格しました。公立中高一貫校入試合格の基盤は石川塾にあると言っても過言ではありません。

石川塾では『理想の国語教科書』などを用いた「要旨要約」で長い文章を読み取る訓練を行い、受検対策のテキストで本格的な入試様式に則った問題演習を繰り返し、公立中高一貫校の受検スタイルと、その解答の“型”を定着させます。そうすることで長い文章を読む集中力と読解力、高得点を狙える文章力が手に入れます。(T.S.記)

ぜひ石川塾で難関校の壁を突破しましょう!!!

主な中学受験志望校(2024年度在塾生)

- ・筑波大学附属駒場中学校
- ・桜蔭中学校
- ・慶應義塾中等部
- ・早稲田実業学校中等部
- ・駒場東邦中学校
- ・穎明館中学校
- ・桐光学園中学校
- ・共立女子第二中学校
- ・東京都立桜修館中等教育学校
- ・神奈川県立相模原中等教育学校

※(石川塾) TEL: 042-710-5768

(園児から無料相談を受付けています♪いつでも気軽にお電話ご来塾ください)

A 君に都立高校合格の声を聞きました

石川塾で都立高校受験をしました。石川塾の良さ・特徴は、先生の人柄の良さや、先生としての一面だけでない人間味が見えることだと思います。大手の塾に通うことも考えましたが、先生と学びたいという思いや人柄に引かれ、石川塾に通い続けました。僕は中学時代に部活に入っていて、引退してから燃え尽きたり、やる気がでなかつたり受験生としてまずい状況でした。中三の秋まで受験勉強というものをしていませんでした。高校入試の過去問をはじめて解いたときは、数学が40点、国語70点、英語が60点、理科25点、社会30点台でした。冬という受験生としては遅すぎるスタートでしたが、先生と一緒に勉強して最後に過去問をした時には、数学80点、国語96点、英語82点、理科76点、社会65点まで上がりました。低いものもありますが、冬からのスタートとは思えないぐらいに点数をあげていただきました。先生のお力添えがあり、志望校に合格することができました。先生には感謝しかありません。勉強が苦手、嫌いだけど行きたい学校がある人は石川塾に通うことをおすすめします。(例えば:僕はラグビー部のある高校へ行きたい/私は日本料理の学校へ進みたい/ボクは船に乗る学校へ行くんだ/私は海外へ留学したい/ボクたちは通信制高校がイイな/などなど)

数学は【生き抜くために/仕事に/バイトに/役に立ち/ハッピーになれます】

数学はノートの取り方から始めると、できるようになります。

計算の仕方から始めると、できるようになります。(等号・位をそろえると)

図の描き方から始めると、できるようになります。(コンパスと三角定規を使うと)

式の立て方から始めると、できるようになります。(文字を数のように扱うと)

※高校入試数学は図形問題が 5 割です。(問題の図を頭に描く:イメージ力)

(1:式の計算 2:文字式の利用と証明問題 3:一次二次関数グラフと図形 4:平面図形と証明問題 5:空間図形と動点)

※学校や塾の授業で分からないところを、まちがえたところを先生や友達に聞けないまま分からなくなっている生徒は多いと思います。

※石川塾では、生徒がわからないところを一人一人にききます。まちがえたところ、あやふやなところをわかるまで、問題文の意味、解き方を一人一人理解できるようにするまで、ていねいに教えます。

※(石川塾) Tel: 042-710-5768

(高校受験～あせらず、あわてず、あきらめず～まだ間に合います)

高校生時代～大学受験 **読み書き算数 石川塾 創立 26 周年**

～英語は大学受験の“天王山”、明暗を分ける教科です～

英語の成績が悪くても大丈夫！！

やりたいことがある人、大学へ行きたい人、英語をやり直したい人！

～できるようになるまで、じっくり向き合います～

～通信制高校から**早稲田大学**を目指し③～

僕は通信制高校の一年生です。警察官になりたいので、法学部を志望しています。塾長に背中をおされ、早稲田大学法学部を第一志望にしました。英語・国語・数学の三教科の一般受験をする予定で、石川塾で学んでいます。

英語のテキストは「英語長文」を使っています。定期試験レベルの BASIC からはじめ、国公立大レベルの発展問題700まで4冊あります。BASIC(15回分)の大意を終え、二巡目は長文全文のスピーキングとライティングのテストです。(1回分)それぞれ10日ずつ練習します。一回ごと本文を見ずに英文を言い、書くのは、かなり厳しいトレーニングです。

石川塾では**単語帳作り**から始めます。電子辞書を引き、単語を発音し、発音記号、原義、派生語、品詞、意味、用例、単語にまつわる知識など、載っている説明を全て書いています。長文を読みながら感じたことは、単語を知っているかどうかは英文の意味文脈を捉えるうえで、大切であると痛感しました。単語とその品詞・例文などを覚えていれば、どれが主語(S)・動詞(V)なのかを推測できます。やはり、先生の言う通り、単語と用例が大切だと改めて思いました。ただ、単語帳を作るには時間と労力(根気と集中力)が要ります。今後も語彙を増やし、英文のセンスを磨くために、日々愉しく取り組んで行きたいと思います。

国語は、課題図書「英語達人列伝 I・II」の**要旨要約**を2000字にまとめ隔週ごとに提出します。達人たちがどのように英語を学んだか具体的に書かれているので、英語のやる気が出ます。**古文の現代語訳への対訳**もやっています。

数学 Iは、600ページを超える参考書を使用し、ノートに1問1問解いていきます。中学の復習から始め「集合」「命題と条件」まで230ページほど進みました。(Y.M.記)

【英・国・数で受験できる主な大学(法学部)】

早稲田、上智、青山、立教、明治、中央、法政、成蹊、明治学院、学習院、成城、國學院、武蔵、日本、東洋、駒澤、専修、東海、亜細亜、帝京、国士館、関東学院、桐蔭横浜、日本文化

(注) 英語国語が必修で数学(IA・2B)が選択科目になっている大学

※(石川塾) TEL: **042-710-5768**

(あの時もっとやっていれば・・・後悔しないように・・・将来を愉しめるように・・・)

◎ステップアップのための漢検・数検・英語検定◎

■学年に関係なくチャレンジできる！

お申し込み時に過去問とチェック&リピート表をお渡しします♡♡●家でもどんどん勉強できるよう取り組み方は授業で伝授します♡♡●漢字検定は学年に関係なくどんどんチャレンジしよう♡♡●算数検定・数学検定は1学年・2学年上の級にチャレンジしよう♡♡●英検は各級の語彙・構文をしっかりと指導します♡大人の方の受検もサポートいたします♡♡過去問とチェック&リピート表をお渡しします♡♡

漢検 3 級以上取得すると高校入試で内申点が加点されます♡♡

英検 2 級以上は大学推薦入試で加点♡♡一般入試で入学試験免除もあり♡♡

漢検の日程(石川塾)	数検の日程(石川塾)
2025/1/25/土曜 申込終了	2025/2/8/土曜
2025/2/15/土曜	2025/3/1/土曜 申込受付中
2025/6月実施予定	2025/6月実施予定



お申し込み・お問合せは石川塾まで♡電話 042-710-5768

※英検は石川塾では受験できません。

●スタッフ・鈴木天羅からの VOICE●暑かったと思ったら一気に寒くなり、まるで秋の存在を忘れたかのような異常な気候でした。10、11 月はどこの酒屋も「ひやおろし」の文字を掲げていたのに、それを味わう暇もなくすっかり熱燗の季節到来となりました。今日この頃、体を壊してしまう人がたくさん出てきています。私自身も大学受験の時分、年末に高熱を出し 38℃で正月を迎えた経験があります。去年も 11 月に風邪をひき、そして今年も同じ時期に風邪をひきました。一度体調を壊してしまうと、あとに予定していた計画がご破算になってしまうので、特に受験を控える方は十分にお気をつけください。毎日勉強に追われ、多方から発破をかけられての生活かと思いますが、その分自分の体をないがしろにしがちです。単語や語句も忘れてはいけませんが、それ以上に自身の体調管理を忘れないように。皆様のご健康をお祈りしております●

●編集長・望月勇輝からの VOICE●新年あけましておめでとうございます。昨年の夏から石川塾のスタッフとして授業に参加しています。望月勇輝と申します。石川塾には、幼稚園年長から通っていて、今も先生の授業を受講しています。高校一年生です。生徒のみなさんと一緒に楽しく学んでいきたいと思っています。また、今年の夏から朗読会に参加させていただいています。いろいろな方から、貴重なお話を聞かせてもらい、毎回驚きや発見など、楽しくたくさん学ばせてもらっています。また今回、VOICE の編集も担当させていただきました。初めての経験で不慣れなところもありましたが、先生にサポートしていただき、なんとか作成することができました。教える立場として授業に参加したり、編集に参加させてもらったりと、その責任を感じつつも、非常に新鮮で楽しい一年でした。来年はもっと楽しい授業・時間にできるようにしていきます。何卒よろしくお祈りします●

●編集兼発行人・石川剛からの VOICE●(昨年は)「閉ざされた言語空間」の著者江藤淳さんが亡くなって25年/夏の日でした/私も間もなく勤め先を辞め/その年に千年工房を設立25年経ちます/小生5年前と3年前と二度倒れ/一度は下血失神し一度は心臓が止まりかけ/二度とも救急治療を受け事なきを得ました/小生留守の間/読み書き算数塾を繋いでくれたのがスタッフの渡邊光樹さんです/彼女は昨年末に石川塾を辞め今後は看護師の仕事に専従します/(昨年・一昨年と)小生の子どもの子ども・孫の世代でもある鈴木天羅くん(大2)と望月勇輝くん(高1)が編集した作品/小誌「2025年千の声 VOICE」を熟読ください/(新年の)「読み会初め」朗読会は第2部第7章の東條元首相の弁護人清瀬一郎博士の陳述から始めます/立派な日本人です/「その人の声」を聞きに 1 月 12 日ぜひ御来塾ください/「この本は、今の日本人が、必ず読んで置くべき重要な文章と思ひます」(歌人:岡井隆 あとがきより)/「新たな学習」は生涯に渉る「冒険」です●

□石川塾長に「ききたい」「たずねたい」「参加したい」(いつでもなんでも気軽にコール/☎042-710-5768)

□<2025 年 新年号「千の声 VOICE」第 22 号> 令和 7 年 1 月 1 日発行 ■HP「千の声ボイス」にバックナンバーを掲載

■〒194-0021 町田市中町1-30-8 菅井町田ビル2F/町高通り・税務署近く ■☎042-710-5768